



父の原稿用紙

平田オリザ

公務員の母が外で働いて、シナリオライター父が家に一日中いたものだから、子どものころ、私はどちつかという父と過す時間の方が長かった。

男親というのは、子どもに合わせて遊ぶということができない。将棋が趣味なら将棋を、野球が好きならまずキャッチボールをする。無趣味な私の父は、とにかく私に文章を書かせることをした。

家には、父親が発売して買った名前入りの原稿用紙があつて、私は三歳の時から、それに文章を書いていた。原稿用紙は、急な階段に積み重ねられていて、何枚でもとっていいことになっていて、

五歳の時には、何が買いたいものがあるか、そのための企画書を書かなければならなかった。そこには、「何を買いたいのか」「なぜ買いたいのか」として「買ったらいっとうなるか」を書かなければ

ならない。こうして私は、物書きになるように、まるで『巨人の星』の星飛雄馬のように育てられた。

十八歳で、はじめての本を出版したときも、そのあとに戯曲を書くようになってからも、しばらくの間、父の原稿用紙の、名前の部分だけを消して使っていた。だが飛雄馬が、プロになって、体格のハンデから球質が軽いという致命的欠陥に苦悩するうちに、私も大学を出て、演劇を一生の仕事にしようとしたときに、一つの壁にぶつかった。父から譲り受けた文体では、何のオリジナリティもないことに気がついたのだ。

それから数年、私の模索の季節が過ぎ、今の「現代口語演劇」と呼ばれる、新しい口語体のスタイルの演劇が誕生した。祖父も高村光太郎や草野心平といった面々と、詩話、歴史の同人を務めていたような家系だから、美しく、力強い、いわば「益舞男ぶり」の文体を私はたたき込まれていた。それを、どっぴかして、生活に根ざした。もっと身近な言葉で台詞が書けるように。数年間、自分の文体を鍛え直したのだ。飛雄馬が、魔球大リーグボール1号を、死闘の末に獲得したように。

今はもう、父の原稿用紙もないけれど、

平田オリザ(ひらた・おりざ) 1962年、東京生まれ。95年「東京ノート」で第39回岸田國士戯曲賞受賞。国際基督教大学在学中に結成した劇団「青年団」を率いて、自ら支配人をつとめる「こまばアゴラ劇場」を拠点とし国内外で幅広く活動。
<http://www.seinendan.org>



こまばアゴラ劇場にて

パソコンで原稿を書くときには、ワープロソフトに組み込まれている原稿用紙の書式を呼び出して、わざわざそのマスを埋めながら書いている。もうそろそろ紙で書いてきた時間よりも、機械で書いている時間の方が長くなるのだが、それでも、原稿用紙で文の長さを体感する感覚が染みついてきているのだ。

北京で仕事をしているときに、中国人のプロデューサーが、私のノートパソコンの画面をのぞき込んで、「これは、自分で作った画面なの?」と聞いてきた。中国でも、かつて作家は皆、原稿用紙に書いていたのだが、そういう人は今では少なくなってしまうそうだ。

韓国に留学していたときも、私は、大学の生協で買求めた原稿用紙を使っていた。マスを埋めるといっことは、漢字文化圏の作家の共通体験なのかもしれない。

PAPER Q & A Vol.13

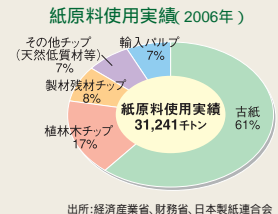
Q. 製紙産業では、リサイクルにどんな特徴があるんですか?

A. 製品も、原料としての木材も、ともにリサイクルできることです。

私たちは、製品として市場に出た紙を「古紙」として回収し、再び新しい紙に作りかえる「紙のリサイクル」に取り組んでいます。また、海外を中心に、長期にわたる展望を見据えながら植林事業を行っています。こうした紙の原料としての「木材」を育てていく「森のリサイクル」も積極的に進めています。

資源を損なうことなく、消費者のニーズに応じていくこと、それが

資源循環型産業である私たち製紙産業の大切な使命だと考えています。



次回は6月7日号、来生えつさんです。